

独立行政法人国立病院機構

東京医療センター

臨床研究センター

研究年報

2010

National Institute of Sensory Organs

National Hospital Organization Tokyo Medical Center

2010 年研究年報 巻頭言

平成 22 年度の研究年報を発行するに当たって

平成 23 年（2011 年）3 月 11 日は東日本大震災によって長くわれわれに記憶されるに違いない。2009 年は総選挙で民主党が歴史的な大勝利をおさめ政権が自民党から民主党に変わった。しかし、税金の落ち込みで起る財源不足によって民主党の政策実行困難が分かるにつれ、当初はマニフェストに酔った感のあった国民も次第に覚醒しはじめたところの自然災害であった。

災害当初の通信制限による情報収集は困難を極めた。国立病院機構本部は岩手、宮城、福島県への DMAT 派遣、引き続き医療支援部隊の派遣で手一杯であった。東京医療センターも DMAT を気仙沼や羽田空港に派遣し、その後の医療班派遣をどのようにするか考えていた。それとは別にわれわれが所属する関東信越地方においても茨城県、栃木県を中心に茨城東病院、水戸医療センター、宇都宮病院などの機構病院でライフラインの途絶、建物損壊が関東信越ブロック事務所での情報収集の結果明らかとなった。東北地方に大勢の人員を割くのは無理と判断し、関信は他ブロックには迷惑をかけずに単独でブロック内での支援体制を作ることを決心し、食糧支援、人的支援を行った。福島原発事故では炉心溶融も予測させる水素爆発で建屋の損壊が起り、放射能を帯びた物質の飛散が懸念され放射線技士派遣となった。つなみ被害で損壊したいわき病院の患者さんをブロックで引き受けることになり、茨城東、水戸医療センター、霞ヶ浦、栃木病院は被災病院でありながらいわき病院あるいは周辺施設からの患者を収容し奮闘した。情報収集、指揮系統について考えさせられる春であった。

今年度 2010 年のセンターの仕事のなかで、オカルト黄斑シストロフィーの原因遺伝子解明の仕事は特筆すべき業績と考えている。元臨床研究センター長であられた三宅養三先生以来研究にたずさわった人達の熱意の結集であり敬意を表したい。直ちに治療法に結びつくわけではないようであるが、今後の仕事の発展を期待する。

多くの医療者は災害支援のため日常業務が多忙となり、宿題となっていた仕事は遅れたのが真実である。しかし東京医療センターの研究部門は、遅れることなく年報をまとめてくれた。これは加我君孝名誉研究センター長のリーダーシップによるところも大きいと感じており感謝したい。

2011 年は三重大学から前眼科学教授宇治幸隆先生を迎えた。眼と耳の指導者が同時に研究センターにいる年は初めてとなる。今年度の業績拡大に期待している。

2011 年 4 月

独立行政法人国立病院機構 東京医療センター
院長 松本純夫

東京医療センター臨床研究センター

平成 22 年 研究報告 目次

巻頭言 松本純夫 東京医療センター病院長

I. 各研究部の研究報告

§ 1 政策医療企画研究部

〔臨床疫学研究室〕	1
1. NPUAP II 度および III 度の褥瘡患者に対する、ラップ療法の創傷治癒促進効果に関する ランダム化比較試験	2
尾藤誠司	
2. 医師の病状説明パターンと、患者の病状理解、病気に対する不安感、医師に対する信頼感、 および治療に関する意思決定との関連に関するランダム割り付け比較調査	5
尾藤誠司	
〔医療経営情報研究室〕	8
3. A case report: Temporal Bone Pathology of a worker who received high doses of radiation by criticality accident	12
Kimitaka Kaga, Toshihiro Tsuzuku, Kenji Kondo, Tetsuo Morizono	
4. 本邦における耳科学の歴史と展開	13
加我君孝	
5. Wartime & Clinical Medicine –戊辰戦争から現代に至る東大医学部の体験–	14
加我君孝	
6. 第 111 回日本耳鼻咽喉科学会総会	15
1) 新生児期に Auditory Neuropathy が疑われ発達とともに異なる検査所見に変化した 2 例 竹腰英樹、新正由紀子、松永達雄、加我君孝、工藤典代	
2) 就学年齢で聴覚認知の良好な Pelizaeus-Merzbacher 病の 2 例 力武正浩、加我君孝	
3) 難聴を伴う超低出生体重児の聴覚と言語能力の発達について 新正由紀子、加我君孝	
7. Arachnoid Cysts Confined to the Internal Auditory Canal and Facial Nerve Canal	
張青、加我君孝、佐野真幸、竹腰英樹	16
8. 先天性難聴児の早期療育の立場からみた言語発達の可塑性の臨界期について	17
内山勉	

9. 高度難聴児の前庭機能について	18
増田毅、加我君孝、竹腰英樹	
10. LINGUISTIC INFLUENCE on PERIPHERAL AUDITORY LATERALIZATION of MEDIAL OLIVOCOCHLEAR EFFERENT SYSTEM ACTIVITY: PRELIMINARY RESULTS in JAPANESE MUSICIANS and NON-MUSICIANS.	19
Perrot X, Kaga K	
[治験管理室]	20
11. 医師主導治験の調整事務局を経験して	22
下川亨明、近藤直樹、齋藤真一郎、鈴木義彦、伊藤澄信	

§ 2 視覚研究部

視覚研究部	25
[眼光学研究室]	
12. 先天性角膜混濁の実態把握と診断法確立のための研究	26
山田昌和	
[視覚生理学研究室]	
13. 光干渉断層計 (OCT) によるオカルト黄斑ジストロフィー (三宅病) の診断および病期分類	
角田和繁	31
[ロービジョン研究室]	33
14. トーリック眼内レンズの光学特性と視機能	34
野田徹、大沼一彦	
15. 緑内障患者群における脳内構造変化に関する研究	39
吉田正樹、Boucard Christine、柴琢也、榎本千恵子、野田徹	

§ 3 聴覚・平衡覚研究部

聴覚・平衡覚研究部	43
16. 加齢性難聴に対する QOL と酸化ストレスを指標とした個別化治療の開発に関する研究	
補聴器装用による聴覚コミュニケーション環境改善因子の検討	45
藤井正人 南修司郎	
17. Auditory Neuropathy の遺伝子解析とその臨床応用	48
松永達雄	
18. 難聴モデル動物内耳におけるエビジェネティック制御機構の解析	50
務台英樹	
19. 新規変異型 KCNQ4 新規変異体蛋白質の立体構造情報による感音性難聴の検証	52
難波一徳	

20. 聴覚障害における聴覚伝導路の可塑性に関する研究	54
南修司郎	
21. 頭頸部扁平上皮癌におけるヒト乳頭腫ウイルス (HPV) の関与	56
徳丸裕、藤井正人	
22. 頭頸部扁平上皮癌におけるがん幹細胞様細胞の存在と maker の発現に関する検討	59
羽生昇 徳丸裕 藤井正人	
23. ラットを用いた頭蓋感染モデル作成に関する研究	60
落合博子	

§ 4 人工臓器・機器開発研究部

人工臓器・機器開発研究部	63
24. エアウェイスコープの小児耳鼻咽喉科診断処置への応用	67
佐々木徹、角田晃一	
25. 匂い源の方向感知に関わる神経メカニズムの解明	69
菊田周、佐藤謙一郎、柏谷英樹、角田晃一、山嵜達也、森憲作	
26. 内視鏡下鼻内手術最適化のための、3次元気流解析を用いた鼻腔機能の検討	71
野村務	

§ 5 分子細胞生物学研究部

分子細胞生物学研究部	73
27. オカルト黄斑ジストロフィー(OMD) の原因遺伝子解明	77
赤堀正和、角田和繁、板橋剛、岩田岳	
28. 黄斑変性カニクイザルの網膜色素上皮細胞の解析及び新規治療法の開発	82
池在龍、岩田岳	
29. 血管内皮細胞における Tropomyosin 1 alpha chain の機能解析	85
岡本はる、岩田岳	

II. 業績集(学会発表、論文、主催シンポジウム)

III. 研究費

IV. 組織表

V. 綱領・規程など

・ 臨床研究センター設置運営綱領	183
・ 科学研究費補助金による研究実施規程	186
・ 客員研究員規定	187
・ 倫理委員会規程	189
・ 動物実験委員会規程	194
・ 動物実験指針	196

VI. 臨床研究センター入部・退部他手続書類

・ 入部・退部関係書類	199
・ センター講師宿泊施設利用手順	202

編集後記 加我君孝 名誉臨床研究センター長